

秋山真兄／あきやま・なおえ
APLA共同代表

フィリピン・ネグロス島と日本の民衆連帯運動は、1986年2月、日本ネグロス・キャンペーン委員会（JNCN、APLAの前身組織）

設立によって開始され、今年で25年もの年月が経った。25年の間には失敗や失望も多々あったものの、「継続は力なり」といわれる通り、

日本とネグロスの民衆連帯、25年が経ちました。

日本とネグロスの人びとの連帯25周年を記念するプログラムが2011年7月15日、ネグロス州都バコロド市で開かれた。APLAの前身「飢餓に瀕したネグロスの子どもたちを助けよう」と日本ネグロス・キャンペーン委員会が設立されたのが1986年2月。砂糖価格の暴落に端を発したネグロスの救援活動は、飢餓をもたらす根源に迫る民衆どうしの連帯運動に発展、人と人がつながり合う民衆交易という仕組みを作ってきた。さまざま困難を乗り越えたこれまでの歩みを、いろいろな人の声とともに送りする。（編集部）

ネグロスと日本、民衆連帯の25年

心が動き、思いが繋がった。

特集



25周年記念プログラム、参加者全員で。

BON VOYAGE

前島宗甫／まえじま・むねとし
日本基督教団牧師



1 970年代、F・マルコス大統領独裁政権時代、フィリピンと日本を通過バナナポートがフィリピンの民主化闘争の手助けをしたことがありました。情報が統制されていたなかで民衆側の情報が信頼できるバナナポートの船長によって運ばれ、大阪から世界に発信するという働きが密かに執り行われたのでした。日・比の民衆連帯を示すひとこまです。

民主主義を封じ込みながら開発独裁政権維持を図るマルコス大統領と、それを支援することによって経済権益を図る日本。その両国で民主主義を創出しようとする民衆連帯がさまざまに展開されていきました。ナボタス漁港の近代化を請け負った日本の企業がナボタス村を浸水させてしまった杜撰な工事、また製鉄会社によるミンダナオへの公害輸出に対する問題提起と反対運動などがあげられます。

1986年2月、フィリピン民衆はマルコス大統領を国外に追い出しました。その日、日本ネグロス・キャンペーン委員会（JNCN）が誕生します。この背後に、先に述べたような、70年代から形成されてきた民衆連帯とそれに基づく

信頼関係があったことは、疑う余地はありません。

今、日・比間に新たなバナナポートが通っています。日・比双方の民衆が互いの自立をめざす、その夢を運ぶポートでもあります。この夢は多くの人びとによって支えられてきました。命をかけて支えた人も少なくはありませんし、天に召された人も多くなりました。多くの人びとの情熱が、海を越えて偉大な物語を創り出してきたのです。

バナナという「モノ」が私たちに「語り」かけをしてきました。実に雄弁に語りかけてきました。いったいどれだけの「バナナ物語」が私たちのうちに共有されているのでしょうか。そして、また新しい物語が生まれることでしょうか。

新しい物語を創り出すのは情熱です。とくに若い人たちの情熱に期待します。Nothing great without enthusiasm. 情熱なくしては偉大なことはない。これからのようなバナナポートが海を渡るのでしょうか。BON VOYAGE! ■

（注）バナナの専用運搬船

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」（水たまり）が現れて、ポコポコ同士が繋がりはじめ、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけば繋がっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 14 2011.11.01

- 02 Relay Essay ポコポコ⑭ BON VOYAGE ◎前島宗甫
- 03 【特集】心が動き、思いが繋がった—ネグロスと日本、民衆連帯の25年
日本とネグロスの民衆連帯、25年が経ちました。◎秋山真兄
25年が生み出してきたこと、時代をつなげていくこと。◎吉澤真満子
日本ネグロス連帯25周年記念プログラム 参加者たちのメッセージ
- 08 【Topics】
原発とアジア—原発建設と原発輸出の動き
- 10 【Column】
水俣と日本の今② 甘夏生産者たちの思い◎原田利恵
マイストーリー in ジャパン② 【米国】ジェレミー・ハーレイさん
仙人の雑談・濫読② インドはヤバイ◎秋山真兄
Have you ever seen the Cinema?⑧ 『ハート・ロッカー』◎重政栄一郎
- 12 撮っておきアジア⑭ 台湾、台北市および台北市郊外◎小山貴和夫
- 13 APLA生活⑭ パレスチナオリーブオイル石けん◎荻沼民
- 14 【Voice from APLA partners】
【東ティモールより】持続可能な農業についてのワークショップを開催
- 15 事務局便り

表紙のことば

この布の大きさは、約60cm×145cm。これをさらに細長く折りたたみ、ちょっと肌寒いときなどに、首に巻いたりして活用しています。さて、この布はどこの布か。実は正確に思い出せずいます。15年ほど前、同僚から出張のお土産としていただいたもので、かすかな記憶でラオスのものと記憶しているのですが、今回この記事を書くにあたりラオスの布で検索をしても、似たような色合いや図柄が出てきません。綿の生地に色鮮やかな配色。観光客向けに手軽なお土産用としてアレンジされたものなのでしょう。あるいは一時期流行った柄なのか。普段何の気なしに使っている布、重宝している割には、つくった人の顔が見えていなかったな一、とあらためて認識しました。（赤松結希）

25年の積み重ねが作り出してきたものは、今大きな力となっている。そのことをネグロスと日本の仲間たちが一緒に振り返り、確認し、そしてこれからのことを語り合おうと、2011年7月15日、日本ネグロス連帯25周年記念プログラムがネグロス州都バコロド市で開催された。日本からは元JCNIC/APL Aのネットワーク関係者、生協関係者、APL Aと(株)オルター・トレード・ジャパン(ALT)スタッフなど20人、ネグロスからはバランゴンバナナや砂糖キビ生産者、野菜生産者、カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF・RC)農業研修生、オルター・トレード社(ALT)関係者、JCNIC時代に飢餓緊急救援・国内難民支援・農地解放運動・営農支援などを一緒に進めた元NGOスタッフなど約80人、総勢約100人が参加した。

25年をともに振り返る

まず皆で、国際砂糖価格暴落によって農園主に見捨てられ飢餓に襲われた農場労働者家族、大土地所有制の下で貧困と弾圧に苦しんだ零細・小農民、そしてこの社会

25年が生み出してきたこと、時代をつなげていくべき。

吉澤真満子／よしざわまみこ
APL A事務局長

日本とネグロスの連帯を先導してきたパイオニアたちが、5年間を振り返り言った。「悲しいこと、心が張り裂けそうになるくらい辛かったこともたくさんあった。でも、楽しかった」。この言葉が印象に残っている。ネグロスと日本をつなぐ仕事を始めて以降、その交流の現場で人びとの心が動く場面にも何度か立ち会った。大きな困難、壁にぶち当たり、それぞれに心の葛藤を抱えながら歩んできた道のりがあったと思うが、その気持ちに共有されたとき、人びとの絆は深まっていった。日本とネグロスの25年間の歴史は、その積み重ねだったのかもしれない。

連帯と民衆交易

エスペランサ農園のリーダーであるリトさんは、地主との命をかけた農地闘争を経験した。「私たちがごん底のとき、日本の皆さんはここに来て、無視されていた



自立した農民として。

的不正義を打ち壊して新しい社会を創ろうと血と汗と涙を流しつつ闘ってきた人たちのこと、そして闘い半ばで倒れた仲間、連帯運動を支えてくれた故人も思い起こした。何よりもよかったことは、集った若者たちが、自分が今在るのは同席している親たちとその同世代の人たちの七転八起の忍耐強い闘いによって与えられたことを、改めて自覚できたことだろう。

そして日本・ネグロス民衆連帯運動によって、飢餓状況のなかで多くの民衆が生き延びられたこと、農地を獲得して自前で生産を開始したこと、バランゴンバナナとマスコバド糖の民衆交易によって暮らしの改善が果たされてきたことなどを振り返った。同時に、自然災害やウィルス病害によるバナナの全滅、現場の状況を十分に把握できなかったり、現場の能力不足で失敗に終わった様々なプロジェクト、長い農奴の生活によって身につけてしまった依存性からの克服の困難さ、農民・農業は価値が低いものと思ってきた心性なども、正直にシェアされた。そして、有機農業の重要性の認識とその展開、パッキングなど小さな仕事

私たちと一緒に泣いて、共感して、考えてくれた。だから強くなれた。マスコバド糖やバランゴンバナナを日本へ送り続けることで、自分たちは頑張っているよと伝えたい。連帯のシンボルだと思っている」と語った。ATJ初代社長堀田正彦さんが民衆交易について言っている。「コト」から「モノ」へ、連帯という概念をバナナというものに変えて、言葉や励ましだけでは具体的な協同連帯の関係

民衆交易事業を支えているという自覚、今では誇りを持って農民として生きることでできることなど、これからの新しい時代を切り開いていく鍵を、皆等しく感じたのではなからうか。特にKF・RCの20歳前後の研修生が、親がせめて子どもだけは脱出させたいと思いつづけてきた村での生活を積極的に受け継ぎ、農業で暮らしを立てていくことの重要性を語ったとき、25年間闘い、活動してきた者たちの心は深い感動で溢れたのではなからうか。

これから先の25年にむけて

もちろん、これからも様々な問題にぶつかることは間違いない。農業の自由化に翻弄されること、すでに中国などから安い農産物が輸入されている現実、有機栽培の価値をまだまだ認めてもらえないこと、ここ数年の砂糖キビ価格暴騰に酔ってしまうことはないのか、などである。民衆交易も事業・組織の拡大による歪みが生じてきていないか。特にATCは事業構造や生産者との関係のあり方などを

性」だと。リトさんの発言は、こうした大きな仕組みを、現場のリーダーが実感として心から発したものだと感じた。

時代が巡り、民衆交易という言葉は今の世代には分かりにくいものとなってはいないか、フェアトレードとは何が違うのか、議論することも多い。しかし、相手を思い合う人びとが、互いの立場を超えて共感してきたということが、全ての原動力であり、それを仕組みとしたものが民衆交易であると再認識するに至った。英語で民衆交易は「People to People Trade」。オルター・トレード社(ALT)社長のノルマさんが言った。「連帯のなかには、貧しい人びとと、日本の市民との共通の関心事



夢を語るKF-RCの研修生たち。

もう一度原点に戻って考え直すことが必要になっている。それらのことも、記念会とその前に実施された地域訪問で話し合われた。「飢餓に襲われているネグロスの子どもたちを救おう」ということから始まった日本・ネグロス民衆連帯運動の25年目、その年に福島原発事故が発生し、日本の子どもたちが放射性物質に襲われ、深刻な放射能被曝に晒されている。子どもたちが社会構造の歪みや不正義による被害を最も受けるという事実を改めて覚え、その解決に向けて私たちの連帯運動は次の25年をめざして進もうと確認し合う集いにもなった。

こと、それは若い世代が育ち始めていることだった。自立した農民となり、地域の役に立つ。25年前、パイオニアたちがめざしたことが、小さな規模だが新たな世代により実現されようとしている。これから先直面する壁はこれまでの25年とは違うものになるであろう。しかし、今この若者たちも日本の若者たちと交流を深め、学び合いの関係性を築こうとしている。

今や日本とネグロスの連帯は、アジアの仲間にも広がりはじめた。それが、私たちがめざすこれからの方角である。この25年の振り返りのなかでは多くの失敗が語られ、今でも乗り越えるべき課題はたくさんある。こうした経験の蓄積や試行錯誤をアジアの仲間とも分かち合っていく。そこに関わる人、成功する人も限られているかもしれない。しかし、ネグロスと日本で紡いできた人びとのつながりや仕組みが25年間続き、それを受け継ごうとする人たちがいることは、混沌とした今の時代において、規模は小さくとも、大きな希望につながるのではないだろうか。25年目の節目にたくさんの方の大切なことを心に留めた。

新たな時代の中で

そして、もうひとつ。25年を経て見えてきた

日本ネグロス連帯25周年記念プログラム 参加者たちのメッセージ

ATC社長
ノルマ・ムガールさん

これまで、心が動く経験を何度もしてきた。モノやお金の支援は、人の心が動いた結果であったと思う。1986年に日本を訪れ、北海道から広島まで周ることになった。そこではネグロスで起こっている「かわいそうな話」をしないとイケないということもあり、今だから言うと、お金を乞うているようでじめな気持ちがあった。結果的にはとてもたくさんの人とお金が集まって、困っている人たちにお米や水牛を配ることができ、病院にも行けるようになり、本当にありがたかった。

日本側との円卓会議で常に言われ続けたことは「未来のプランを示して」ということ。ここまで連帯が続いてきたことの鍵は、何も強要されなかったことにあると思う。押し付けあう関係でなく、お互いを尊重する関係がそこにはあった。

3日間の日本ネグロス連帯25周年記念ツアー(注1)に同行して、この25年間で自分たちが切り開いてきた成果を見ることができて、奇跡のようだった。皆がそれぞれのストーリーを持って、自分たち自身で暮らしをつくらせてきたことに心を打たれた。特にカネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)の若い研修生たちの言葉、将来の抱負を語る姿に感動した。

今までオルター・トレード・グループ(ATG)(注2)は自分たちの仕事を、貧しい人のため、辺境に追いやられた人のため、と規定してきた。そうした人たちが暮らす地域(現場)に入ってこそ、私たちの役割が生きてくる。その上で、ATGが彼/彼

女らのいのち・暮らしをつくるのではなく、人びとが自分たちの手でつくり、ATGがそのことに刺激を受けてさらに良い仕事をしていく、そういう関係でありたいと改めて感じた。

よく「Empowering poor people(=貧しい人をエンパワーする)」というが、何を「貧しい」とするか、本当の「豊かさ」とは何であるかをエンパワーする側が常に自戒しないとイケない。また、お金とモノだけの関係ではない、太い関係をどうつくってイけるか、どう自由な(今のシステムからの自由・独占的な経済からの自由・お互いを尊敬しあえる自由)関係性をつくってイけるのか。今こそ未来をめざして、この25年間を振り返るとき。どこまで出来て、何が出来ていないのかを見つめ直すときだろう。

〈注1〉7月15日の記念プログラムの前に、日本人参加者たちはバナナや砂糖キビ生産者を訪問した。

〈注2〉ネグロスの生産者たちの自立をめざした活動をするグループ組織。現在は、ATC、オルター・トレード財団(ATFD)、マスコパド糖製糖工場(ATMC)で構成される。

ATC専務
ヒルダ・カドゥヤさん

何も無いところから、日本とフィリピンの先達がひとり、ふたりと出会い、今に至っている。大変な時期もあったが、やめなかったこと、あきらめなかったことが今につながっている。どう次の25年間へ向かっていくか、チャレンジの時だ。

ATJ社長
上田 誠さん

各自がそれぞれの場がでがばっていることが改めて確認できた。今日の場に参加して、やってきたこと、やっていきたいことを共有する場がとても大事だと感じている。各自がそれぞれの場に戻って、参加できなかったメンバーに今日のことを共有し、場所は違っても同じ目的に向かって協力していきましょう。そして、5~10年後にまたこういう場をもって、何ができたか確認しましょう。

**ドン・サルバドル・ベネディクト(DSB)/
パンダノン(バナナ産地)の生産者からの質問**

バラゴンバナナは、一つの作物であることを超えて、私たちの生活を変えてきた。バラゴンバナナのおかげで人間らしい生活が可能になったと言っても過言ではない。一人ひとりの生産者だったのが、協同組合として集まることで力をつけて、夢の実現に少しずつ近づいている。日本の仲間やATGがいたからこそ可能だった。しかし、もし何か問題が発生してバラゴンバナナがとれなくなったときに、日本との関係性がどうなるのか?

グリーンコープ共同体代表理事
田中裕子さん

(上記パンダノンでの質問に対して)グリーンコープでは、日本(九州)で豚や牛の病気(注3)で出荷ができなくなったとき、カンパ活動などで生産者を支えた経験がある。仮に、

バナナがなくなったときにパンダノンの生産者がどうしたいかによって、日本の私たちの関わり方も変わってくると思うけれど、こうやって出会えたのだから関係はつながっていくと確信している。

〈注3〉口蹄疫のこと

エスペランサ農園(砂糖キビ産地)
リト・エスタマさん

2003年、収穫祭(注4)の報告のために実際に日本に行ったときに、土地闘争の辛い時代に日本の人たちからの支援でまかなわれた弁護士代などが、裕福な生活を送っている人からの寄付ではなく普通の市民からの寄付であることを知って本当にありがたく思い、仲間たちに伝えてきた。金銭的な支援だけでなく、日本から人が来て、それまで孤立していた自分たちの話を聞いてくれ、そして一緒に泣いてくれたことが驚きであり、大きな支えだった。そうした連帯があったからこそ、今がある。

〈注4〉CLOA(土地所有裁定証書)の取得後、初めて自分たちで砂糖キビを収穫できたことを祝った。

エスペランサ農園(砂糖キビ産地)の女性たちの夢

子どもも全員学校にやったので、今度は自分が大学に行きたい(高卒なので)。先生になりたいので、できれば教育課程で学びたい。

自分でつくった野菜で加工食品をつかって、お金をもっと稼ぎたい。

NARBの協同組合がもっと大きくなってくれることが夢。そうしたら自分はどんな仕事でもする。

JCNC北海道
太田結子さん

懐かしい皆さんにお会いできて、会うたびに涙がこみ上げてきそうな思い。ツアーで、若い人たち、何年も働いてこられた人たちの言葉を聞きながら、私たちが手と手を取りあってやってきたことがこんなに立派な形になったんだなぁと感動している。若い人も髪の毛白くなった人も、いのちを大切にしますます一緒に働いていきましょう!

ネグロス東州(ドマゲッティ)バナナパッキングセンター
エレリン・ランセソさん

15歳からドマゲッティのパッキングセンターで働いていて、今年でちょうど20年。パッキングセンターで働きながら高校を卒業することができた。結婚後は私の収入で家計を支え、子どもたちも卒業まで学校に通わせることができた。それを常に子どもたちに話して聞かせている。これからも一生懸命働いて、いつかただゆっくり過ごせる日が来ることを夢見ている。だから

日本の皆さんにはこれからもたくさんバラゴンバナナを買ってほしい。日本からの訪問者が来てくれることがうれしい。私たちの仕事を評価する手紙をもらったときはみんなとても喜んだ。

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)研修生
ジョネル・ベントゥラさん

僕の親は20年前からバラゴンバナナを出荷しているの、僕はバラゴン・ベビーと言える。家が貧しくて学校も中退するしかなかった。本当は農民ではなく先生になりたい。そんな自分を心配して、父がKF-RCに入れてくれた。始めはKF-RCには何もなくて帰らなかったけど、カルロスさんを始めKF-RCで教えてくれる人たちから、自然に即した方法で畜産、農業をすることが大切だと学んだ。僕の夢は、KF-RCの養豚、農場をもっとよくして、自分の家族の生活をよくしていくこと。これからも様々な課題に直面するかもしれないが、今の僕にはそれでもやっていける自信がある。そして、色んな地域からKF-RCに学びに来てほしい。誰かが来る限り、自分もKF-RCのことを伝えていきたい。



エスペランサ農園の仲間たちと記念写真。

原発とアジア

原発建設と原発輸出の動き

2011年7月30日から8月6日まで、韓国、台湾、タイ、インドネシア、インド、フィリピン、中国から、脱原発にかかわる住民や活動家来日した。1993年から各国で開催されていたノーニュークス・アジアフォーラムが日本で緊急開催されたためだ。アジア各国・地域の仲間が、福島の状態を知り、それを世界に伝えること、また、アジア諸国への原発輸出を止めるために、アジア内の連帯を深めることが目的だ。本稿では、7月31日に東京で開催された国際シンポジウムの内容をまとめる。

〈注1〉早稲田大学アジア研究機構 アジア平和研究所主催。

電量のうち原発が占める割合を59%まで引き上げる方針を打ち出した。「低炭素グリーン成長」と名づけられたこの計画を政府は意欲的に進めている。国内については原発の増設、対外的には海外資源開発計画と原発輸出計画が含まれる。韓国は、石油、石炭などのエネルギー資源の97%を輸入に頼っており、07年には22億ドルに過ぎなかった海外への石炭、ガス開発投資額が、11年には78億ドルと大幅に増えている。

韓国初の原発輸出：UAE（アラブ首長国連邦）

09年、韓国は初めて海外への原発輸出を実現した。韓国の代表的な建設会社を率い、中東での建設工事の経験も持つ李明博大統領にとって、UAEに原発を売り込んだことは、自身の政治的立場を再強化する意味も合わせ持つ。

【インドネシアからの報告】 イスラーム指導者 ヌルディン・アミンさん

インドネシアには研究炉を除けばまだ原発はない。しかし、90年代以降、原発建設の計画が持ち上がっている。93年には実行可能性調査(F/S)をニュージエックが落札。国際協力銀行(IBC)から融資を受け、中ジャワ州ジュバラ県ムリア原発計画の調査を実施した(96年終了)。インドネシアでは、ムリア以外にも、6カ所で原発建設計画が持ち上がっている。97年には、アジア経済危機の影響で原発計画の中止が発表されたが、03、04年には、エネルギー危機を理由に再燃。日本以外にもロシアや韓国などがインドネシアへの原発輸出を目論んでおり、福島原発事故後、ユドヨノ大統領は「原発は主要な選択肢ではない」と発表したものの、同時にハッタ・ラジャサ経済担当調整相はサンクトペテルブルグで原子力協定に調印している。

一方、建設予定地となっているムリア半島周辺の住民は、農民、漁民、労働者が約8、9割を占める。土地の収用、放射能汚染で生活の糧が脅かされること、子孫の暮らしを脅かす放射性廃棄物を残したくない、都市(大工業)の経済・政治利益の生贄になるという理由から、住民の約7割が原発建設に反対している。イスラーム指導者たちも原子力を

UAEへの原発輸出を受注した際には、メディアでも大々的に取り扱われ、記者会見の様子が緊急で生放送された。その後数日間、この件に関する報道がテレビ新聞で流され続けた。原発輸出に反対する流れは「左翼不純勢力」というレッテルを貼られ、インターネット上では、中道的な立場であっても「左翼アカ」として批判された。

しかし、この案件に関しては、疑念がわき始めている。まず、韓国側発表の受注額400億ドルが、UAE側では200億ドルである、という記事がインターネット上で広がり、最終的に韓国電力は186億ドルと修正した。次に、国民がUAEへの原発輸出に疑問を抱いたのが、受注後1年してから発表されたUAEへの軍派遣だ。軍事的事項が契約条件に含まれているという噂を否定し続けてきた政府だったが、これにより契約内容の嘘が露になった。また、建設費をめぐる韓国輸出銀行の融資に関しても批判があがっている。工事費総額186億ドルのうち90、110億ドルを28年間融資するというものだが、これほど巨額な融資を韓国が海外にしたことはない。韓国はUAEより国家信用度が低く、高い金利で借金し、低い金利で融資する構造となる。原発受注当時こうしたことは知らされていなかった。これに対し、韓国の市民団体らは共同で、UAE原発の契約内容の公開と調査のための国税調査を国会に求めている。また、UAEへの軍派遣に伴

タイでは66年から原発建設が計画され、タイ発電公社(EGAT)は、人材育成として日本や中国での技術講習に人を送ってきた。また、建設予定地には学校やお寺をつくったり、「原子力は安価な未来のエネルギー」とうたう一方的な広報を繰り返すなど、日本と同じやり方で進めてきている。一方で、タイでの再生可能エネルギーの潜在力は高く、その多様なエネルギーの発電量の合計は、原発を上回る。

福島の原発事故後、タイ国民の83、4%が原発に反対している。政府は原子力発電プロジェクトを今後3年以上遅らせ

い、この原発輸出問題は、環境団体以外にも平和団体を含めた市民社会全体の問題となった。

福島原発事故後の姿勢

11年3月の福島での原発事故を受けても、李政権の原発に対するスタンスは変わらず、3月14日には、UAE原発起工式が執り行われ、大統領自身も参席している。福島原発事故後、保守メディアさえ原発の危険性を語るなか、起工式への参加は、原発に対する信頼を失っていないことの意味表示と受け止められた。3月半ばには、国内の新規原発用地調査のため、調査団が3つの候補地の訪問もしている。

今、韓国の原子力産業界は「危機をチャンスに変える」とし、今後の原発輸出の機会をにらみ、核関連研究開発費を大幅に増額する必要性をうたっている。今後日本が思うように原発輸出を進めることができないと想定されるなか、韓国はそこをチャンスとして考えている。

こうした韓国の動きを注視し、見守っていく一方で、情報公開の透明性が低い原子力産業界と政府の特性上、議論の内実を知ることの難しさが残っている。原発輸出の問題については、国際的な連帯や共同監視を進めていく必要がある。

〈注2〉韓国での「左翼」とは朝鮮民主主義人民共和国との関係を連想させる言葉としてある。一般的に左翼は「左派」と呼ばれる。

ることを決定した。しかし、計画はそのまま進められている。福島の事故を教訓に、日本と韓国には原発輸出の政策を見直してほしい。タイには原発はいらない。原子力の平和利用は、原子力を使わないことである。

パネルディスカッション

上述3カ国の報告の後、パネルディスカッションが開かれた。そのポイントは以下の通り。

▼まずは、自国で原発を止める。次に日本と韓国の動きが重要。日本で脱原発ができないのであれば、韓国への説得力を失い、日本が原発を止めても、韓国が進めれば、その他のアジアの国は原発推進を韓国にならう。日本、韓国が原発を輸出しないよう、アジア全体で反対し、協同で圧力をかけていく。情報交換を密にし、お互いの国の情報を知らせる。

▼宗教の教訓を生かしていく。植物・動物のいのちの大切さと自然を敬って生きる。その価値観を見直す。

▼原子力の「平和利用」という場合、「何もしない」という選択肢があることを忘れてはいけない。福島で起きたことを世界へ広げないためにも、アジア全体で非核を宣言し、世界にも示していくことが必要。(編集部まとめ)■

【タイからの報告】
平和のための開発グループ
ソッサイ・サンソークさん

現在のタイの電力使用量2万メガワットの内訳は、60%が大規模型の工業や企業、20%が一般家庭、残り20%が小規模企業などである。電力のほとんどは、首都バンコク周辺で使用されていて、バンコクにある大手ショッピングセンター3店舗で使う電力が、地方一県の使用量を上回る実態もある。政府による電力開発計画によれば、予測されている最大の電力消費量が、09年と比べ30年には2、4倍になるとされているが、一体誰のための電力なのかを考えさせられる。

アジアの原発関連施設

国	運転中	建設中・計画中	備考
韓国	21基 (4カ所)	11基	軍事用核施設、核実験場跡地もある。
インドネシア	-	-	2基の研究炉
タイ	-	-	1基の研究炉
中国	13基	28基	軍事用核施設、核実験場跡地もある。
台湾	6基 (3カ所)	-	コンリャオに建設された第四原発は東芝と日立による初の原発輸出。
インド	18基 (6カ所)	4基	ウラン採掘から再処理まで、民生用、軍事用双方で独自の核関連施設を持つ。
フィリピン	-	-	マルコス政権下、パタアンに建設するも、民衆運動の高まりで凍結。08年に原発復活の動き活性化。
モンゴル	-	-	日米が共同で10年秋より核燃料処分施設建設を極秘計画。見返りに中部パヤンタルに原発建設も計画。

※ベトナム、ヨルダン、ヒルマ、トルコも原発導入を検討中。 ※ノーニュークス・アジアフォーラム2011パンフレットより

03

仙人の雑読・濫読 02

秋山真兄 / あきやま・なおえ
APLA共同代表



『インド即興旅行』山下洋輔、河野典生
徳間書店 (絶版)

「その歩みがのろからうがなんたらうが、アジアは、生きたい、生きたい、と叫んでいるのだ。西欧は、死にたくない、死にたくない、と云っている。」
アジアのことを考える最適な書物は何かと聞かれた場合、私が必ず勧める堀田善衛『インドで考えたこと』(1957年、岩波新書)の最後のフリーズである。55年前の著作であるが、そこで思索されたアジアや西欧、またそれ以上に日本についての洞察は、今も色あせることなく冴えわたっている。高校生時代にこの本を読んで、インドにいずれ行ってみたいと強く思ったものだ。

インドはヤバイ

「その歩みがのろからうがなんたらうが、アジアは、生きたい、生きたい、と叫んでいるのだ。有名な「火葬」の項はやはり衝撃であった。そして「印度」に行くのはヤバイと思った。妻子を捨てることになりかねないと思ったのだ。

それからは出来るだけ本の中でインドを旅行し考えることにした。インド関連の様々な本を読んだが、なかでも大好きな一冊に山下洋輔・河野典生『インド即興旅行』(1979年、徳間書店、絶版)がある。山下は世界的なフリージャズピアニストである。私が中学1年の時に、高校2年の彼のジャズピアノを聞いてジャズに開眼し、大学時代は新宿ピットインに彼の演奏をよく聴きにいった。しかし就職し、家族ができて、山下の演奏から遠ざかっていった時に、ふと手にした一冊である。山下がインド旅行の先輩である小説家・河野に導かれて「印度中毒(インチュウ)」になつていく。そしてインドは紀元前と現代が同時に存在し、「ベースは紀元前、現代人は幻のごとく漂っている」というつぶやきというか叫びに、私は全くそうどうなづいてしまふのだ。

かくして今なお私は、インドという「ヤバイところ」には行かないことにしている次第だ。

04

Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい?

08

『ハート・ロッカー』(2008年、米国)
【監督】キャスリン・ピグロウ 【出演】ジェレミー・レナー、アンソニー・マッキー

重政栄一郎 / しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー



『ハート・ロッカー』
発売元: フロッドメディア・スタジオ
販売元: ポニーキャニオン
発売日: 発売中 価格: 3,990円(税込)

「戦争中毒」を煩っているのは兵士だけか…
舞台は2004年夏、米国による占領・統治下で、いまだに混沌とするイラク、バグダッド。主人公は米軍の爆発物処理班のリーダー、ジェームズ二等軍曹。破天荒で命知らずの彼は二人の部下と軋轢を起こしつつも自らの任務を淡々とこなす…。街中に仕掛けられた爆弾の標的は米軍兵士などの占領者たち。彼らは攻撃してくる敵のみならず、普通の市民からも歓迎されていない。米兵たちは常にイラク国民からの嫌悪と憎悪、そして怒りの眼差しに囲まれている。自分たちはこの国に「正義」を実現し、「平和」と「民主主義」をもたらしたはずなのに…である。

戦争中毒を煩っているのは兵士だけか…

この映画では、兵士たちが暴行や略奪などの非人道的行為、犯罪行為をするのは無い。彼らは悩み、苦しみ、そして怯えるどこにもいる普通の若者だ。しかし彼らは間違いない、どこかが決定的に壊れている。まさに「戦争中毒」。ジェームズが任務遂行にあたり、型破りで自己中心的な行動をとるのは死への恐怖とストレスを麻痺させたためであろう。

戦地での希望はただ一つ、任務の終了と帰還。しかし戦地で幾人もの人間を殺した、または殺されかけ、手や足や心に生涯癒えることのない傷を負った元兵士たちが帰り着く故郷は、以前と同じ故郷なのだろうか。常時、世界のどこかで戦争を続ける米国の国内には、このような元兵士が日常の風景の中に数多くいる。

01

水俣と日本の今 その2

原田利恵 / はらだ・りえ
環境省国立水俣病総合研究センター研究員



まだ青くて小さな実。『ガイアみなまた』高橋さんの畑にて。(2011年9月29日筆者撮影)

甘夏生産者たちの思い

今回は、水俣の有機栽培の甘夏ミカンのお話です。熊本県の甘夏が市場に初めて出荷されたのが水俣病公式発見の1956年なので、甘夏の歴史は水俣病の歴史と重なります。初期の患者さんの多くは漁師で、水俣病のため漁業ができなくなると陸に上がって甘夏をつくり始めました。しかし、農協指導による農薬散布で体調を崩す人が多く、また水銀の毒に侵された患者が、農薬という毒を使って作物をつくることに矛盾を感じ出し、77年、「被害者は加害者にならない」という決意から「グループきばる」が、79年には「水俣・反農薬連(現はんのうれい)」といった生産者集団が結成されました。患者を支援してきた『相思社』も甘夏に取り組み始めます。

消費者の有機志向が強まり、都市部の生協会員などを中心に売上げは伸びていきました。ところが89年、相思社の「甘夏事件」が起こります。収穫減になる裏年の読み違いと組織運営の甘さから、農薬を使った甘夏が一部、消費者の了承なく出荷されたのです。このことにマスコミ以上に厳しい批判を投げかけたのは、他でもない患者さんたちでした。「相思社は正義を言うところだから、決して間違いはおかしちゃならん」「チッソよりなお悪い」。水俣病患者で語り部の杉本雄さん(1939年生ま)は当時を振り返って、「相思社には、ミカンを愛して育てているという姿勢が見えなかった。やっぱり『支援は支援かな』と思った。支援者は失敗したら帰ればいい。私たちは、失敗は許されん。帰るところはなか」と言います。

1990年、相思社メンバーを中心に『ガイアみなまた』が設立されました。「支援者」は水俣に住み着き、家族をつくり、今や「生産者」として、水俣病事件を共通の痛みとしながら甘夏ミカンを育てています。高齢化・後継者不足に直面しつつ、一部のお子さんたちは都会から戻り、その「思い」を引き継ごうとしています。

02

マイストーリー ジャパン 日本に住む在日外国人たち 【第二回】

【米国】ジェレミー・ハーレイさん / Jeremy Harley
聞き手: 堀芳枝 (APLA理事)



高円寺、トリアノンにて。

「高円寺・素人の乱」主催の反原発デモ。それは高円寺・渋谷・新宿で軽トラックの荷台に音楽機材を詰め込み、ラップやロック、フォークソングで反原発を訴えるという、テモ未経験の若者たちが、音楽やパフォーマンスで意思表示し、サウンドデモという新しいデモを形にしたものだった。今回はこのデモ実行委員会「唯一の外国人」ジェレミー・ハーレイさんを紹介する。

「友よ」や「ファイト!」などを熱唱。Yo! Tubeに「友よ」を歌った動画を上げ、団塊の世代にデモへの参加を呼びかけたところ、ツイッターで坂本龍一がリツイートし、5000人以上の人がチェックした。ジェレミーは今の日本について9・11後の米国と重ねて考えている。米国は9・11からイラク戦争に至ってようやく戦争反対の声をあげた。日本もフクシマ原発の事故が起きたことで、変わるかもしれない、と思っている。軍事大国米国の外交は好ましくないが、ジェレミーのような米国人は大好きだ。私たちはジェレミーのような人びととつながってAlternative People's Linkage in the Worldをやりたい。

いつ、どこから攻撃されるか、どこに爆弾が仕掛けられているか知れない。一緒に行動する仲間が目の前で命を落とす。自らの命も常に危険にさらされる。そんな死と隣り合わせの日々…。そして混乱を極めるバグダッドの理不尽で過酷な現実…。極限の緊張、疑心暗鬼と恐怖が心に根深く巣く、住民への高圧的、攻撃的な態度となって現れる。任務外の時間は要塞と化した基地に引きこもる姿に彼らの心象が見て取れる。

今回のお題

パレスチナオリーブオイル 石けん

レポーター
荻沼 民 / おぎぬま・たみ
（株）オルター・トレード・ジャパン
事業部商品課



パレスチナではオリーブオイルが、古くは灯りを点す灯油として、風邪のときには喉や胸に塗る医薬品として、そしてスキンケアの化粧品としてなど、食用だけでなく日常生活の隅々で使われてきたことは、パレスチナオリーブオイルのファンの方でしたらすでにご存知かもしれません。そんなパレスチナのオリーブオイルを石けん素地原料とし

てできたのが、この『パレスチナオリーブオイル石けん』です。素朴だけと贅沢な石けん

オリブの実と葉っぱの絵と、ちよつとレトロな明朝体で「石鹸」と書かれた緑の箱の中に、ラベンダーとユーカリの香りのする、これまた淡い緑色のころんとした四角い形の石けんが包装紙に包まれています。石けんの側面には「PALESTINE OLIVE OIL」という文字とオリーブをイメージした葉っぱの刻印。なんとも素朴でかわいらしい姿です。

実は、こちらは石けんメーカーとして名高い太陽油脂(株)さんで製造されています。恥ずかしながらこれまで石けんの製法などあまり知らなかったのですが、この『パレスチナオリーブオイル石けん』は、石けんの原料を混ぜ合わせ、ケーキのように枠型に流し入れて、ゆっくり熟成、乾燥させて完成まで2〜3カ月もかかる「粹練り製法」で、たっぷり時間を使って作られています。一つの石けんを作るのにこんなに時間と手間がかかるなんてなんとも贅沢な！

粹型から出された石けんは、やわらかいうちに刻印、ひとつひとつ切斷されて最終的に完成するのですが、

私石けんライフは実はちよつと遅咲き。環境にいいものを、と思っただけで、高橋く大学生になつてちよつと色気など出始めた頃は、顔用のクレンジングやら、ボディソープ、シャンプー、リンス、トリートメントなどには、とにかくいろいろな効能をうたっているものを使っていました。でも、数ばかり多くなるし、本当に自分に合っているのかもよくわからない！そんななか、できるだけ肌や環境に負担がなく、使い心地がいいものを、と考えたら自然と石けんにとどつきましました。色々な石けんを試していますが、このパレスチナオリーブオイル石けんは本当にきめ細かな泡立ちと、洗い流したあとのすっきり感と、それでいて肌の油分を無駄に奪わない感じが気持ちいい！乾燥もするし、汗もかく気まぐれな私の肌にもなじんでくれます。

「化粧用石けん」なので全身にも使えちゃう、個人の好みもあるかもしれませんが、頭を洗うのにも使えちゃう、これ一個で全身をワッシュンと洗えるかなり万能な石けん。個人的には、旅行や出張の時、野外でのキャンプで特にお役立ちです。心地よい匂いとフワフワの泡が、いつもと違う環境でもなんだか気持ちも穏やかにしてくれます。

肌の乾燥が気になる季節、年齢的にもお肌の曲がり角といわれるお年頃へ突入していきませんが、未永く使っていくたい製品です。プレゼントにもすごく喜ばれますよ。



レトロなパッケージと“ころん”とした石けん。



- 1 — 中正紀念堂。1949年に中華民国政権を樹立した蒋介石総統の記念公園にあるモニュメント。現在の台湾では、親大陸派と独立派、漢民族と台湾人の関係が複雑に絡み合っている。2012年1月の総統選挙は、中華民国(台湾)の将来を決める節目となることだろう。
- 2 — 台北市内、隣聖苑の木陰で将棋を楽しむ老人たち。書写を楽しむ姿もあった。良き老境を楽しむ姿が羨ましかった。
- 3 — 約270年の歴史を持つ台北最古の仏教寺院「龍山寺」で祈る姿。周辺は夜市で有名。
- 4 — 台北郊外の街道沿いの露店。南国の作物は立派。
- 5 — 土産物店の親子。台湾北部の山間地にある坂道や階段の多い小さな街、九份にて。漢字という共通項があったので安心して旅ができた。

(2009年9月30日〜10月5日撮影)

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容○アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております!

編集後記

原発事故の収束も放射能汚染対策も震災・津波被害もおさまらないまま、TPP(環太平洋経済連携協定)交渉参加の促進、武器輸出三原則の放棄、BSE(牛海綿状脳症いわゆる狂牛病)～人びとを守ってきたアメリカ牛肉の輸入規制の緩和、沖縄・普天間基地の県内移設固執、と野田民主党政権の暴走が始まった。その暴走を主要メディアが支持し、後押しするという異常な事態が起こっている。もしかしたら自民党時代を含め、最悪の政権かもしれない。(大野)

原発事故が一度おきれば、それはその国の問題だけではなく、世界の問題となる。福島第一原発の事故を受けても、なお原発輸出をあきらめない日本。そして、アジアの各国も原発を止める動きにはなっていない。必要以上に作られる電力利用と原発建設。世界から核をなくしていくために、もっと世界へも目を向け、人びとと連帯していくことが求められている。(吉澤)

10年ほど前、反抗期の勢いで生協主催のネグロス高校生ツアーに参加しました。その後は思い出のひとつとして記憶の押し入れにしまったまま、数年を経てふらりとJCNC、そしてAPLAのスタッフに。気が付けば25年の流れ中に、片足のつま先でちょよっと二度ほど足を踏み入れていました。縁や出会いを結んだり手繰りよせたり、歯車ではなく結び目のひとつであると実感しています。(松田)

ハリナ HALINA

2011年 vol.02-no.14
2011年11月1日発行

【編集長】
大野和興

【編集者】
吉澤真満子、松田麻衣子

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぷら: Alternative Peoples Linkage in Asia)

〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。
http://www.apla.jp/05/05_halina.html

事務局の動き(2011年8月～10月)	
8月 2日	静岡県静岡市・村上園を松田と野川が訪問しました。
8月 3日	茨城県東茨城郡・茨城BMを共同代表秋山氏と吉澤が訪問しました。
8月 10日	栃木県那須塩原市アジア学院を共同代表秋山氏と野川が訪問しました。
8月 26日、27日	BM技術協会主催「BM基礎セミナー第3回」に吉澤と松田が参加しました。
8月 31日	埼玉県さいたま市男女参画センター主催の講座で吉澤が講演しました。
9月 5日～16日	カカオ・ブックレット及びビデオ製作のための現地取材に共同代表村井氏、インドネシアテスク津留と吉澤が同行しました。
9月 7日	ちよだ青空市に出展しました。
9月 6日	東京経済大学・渡辺ゼミのネグロススタディツアーの事前学習会を野川が行いました。
9月 10日、11日	しらたかノラの会5周年企画イベントに共同代表秋山氏、野川、松田が参加しました。
9月 12日～18日	東京経済大学・渡辺ゼミのネグロススタディツアーが開催され、フィリピンテスク大橋がアテンドしました。
9月 17日	APLA理事会開催。
9月 17日～30日	野川が現地調査とパートナー地域訪問のため東ティモールに出張しました。
10月 1日、2日	グローバルフェスタJAPAN2011に出展しました。
10月 3日	グリーンコープ共同体主催の学習会で、フィリピンテスク大橋と野川が講演しました。
10月 15日	APLA presents つながる広げのお話会・第1回を開催。
10月 16日	土と平和の祭典2011に出展しました。
10月 27日、28日	福島県二本松市・二本松有機農業研究会に共同代表疋田氏、吉澤、野川が訪問しました。
10月 29日	パルシステム埼玉県内統合記念イベント「smileリボンザール」に出展しました。
10月 29日	第7回フォーラムアソシエ文化祭に出展しました。

事務局からお知らせ

以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- JICA集団研修「原子力発電基盤整備計画」の中止を求める要請書提出【賛同】
- 【緊急国際署名】日本政府は原発輸出推進政策を即刻止め世界の脱原発をリードしてください【賛同】
- 公開シンポジウム『消費者が考える食品表示の一元化』【賛同】
- TPP交渉への参加に強く反対します(申し入れ)【賛同】

APLAネットショップが新しくなりました!

APLAネットショップをリニューアルし、コンビニ決済やクレジット決済・代金引換にも対応できるようにしました。前より利用しやすくなったネットショップ、ぜひ一度覗いてみてください!

http://www.aplashop.jp

APLA会員限定のメンバーリストを不定期に流しています。

まだ登録されていない方はぜひ登録してください。(事務局までご連絡ください。info@apla.jp)

From East Timor [東ティモールより]
持続可能な農業についてのワークショップを開催

「人が1日3回の食事を必要とするように、土にも栄養が必要。野菜やイモを収穫しっぱなしで、そのままももしなかったら土だって死んでしまうんだよ」とは、東ティモールでパーマカルチャーの普及に取り組みBernard^(注1)のアタイさんの言葉。そんなことはごく当たり前、そう思われる方も多いかもしれない。しかし、長年コーヒーだけを栽培し収穫することで生計を立ててきたコーヒー生産者にとって、そうした「常識」は「目からウロコ」とも言える学びだった。剪定についても、「1日にカップ1杯の水を10人で分け合う状況は辛いよね?」木も同じで、枝が沢山ありすぎたら水や栄養を奪い合ってケンカするから、人間が手を入れて、いい枝だけを残してあげることが大切」という説明に、メンバー全員が深くうなずく。そして、すぐに堆肥づく



落ち葉、牛糞、土を重ねて畝をつくる。

くりや剪定の方法の実演を行う。これは、2011年9月にFunu Caeano(フイトン・カイトン)とGATAMIR(ガタミル)で開催したワークショップの一幕だ。現在、乾季真っ只中の東ティモール。雨季と乾季があるからこそ、おいしいコーヒーが収穫できるのだが(そして、昨年は異常気象により雨が降り続いたため、今年のコーヒーは記録的な不作に終わってしまったのだが…)、自給作物づくりにとって、水がないというのは非常に大きな問題になっている。そのため、毎年やってくる乾季とどう上

手く付き合い、乾いた土地でも作物をつくっていきけるのかを学びたい、というメンバーの要望からワークショップ実施につながった。昨年末から今年頭にかけて実施したフィリピンの農民との交流・学び合いの成果が少しずつ見えはじめていることはすでにご報告した(ハリナNo.13を参照)。野菜づくりも乾季に入る前の1サイクルはそれなりに上手くいき、わずかながらも収入につながったという明るい話もメンバーから聞いた。しかし、乾季に入っ

この仲間からの「農業で成功するコツは、土地と人と知恵の3つ」というアドバイスを思い出すも、知恵の源となる経験も知識もまだまだ不足していることは明らかだ。だからこそ、メンバーにとって、今回のワークショップは非常に大きな励みとなった。土を掘り、その中にコーヒー畑で集めた落ち葉、あちこちに転がっている牛糞、そして土を重ねることで、保水力の高い畝になる。だから、農業用水の確保が難しくても、作物が育ちやすいし、分解が進めば土そのものが豊かになる。さらに、雨季に入ってから、この畝が水をしっかりと吸収することで、大量の雨によって土壌が流されてしまうのを防ぐ役割を果たす。東ティモールの各地で農民と一緒に実践を重ねてきたシンプルだけれど確実な方法だ。アタイさんはこうも語る。「落ち葉や牛糞集めなら、子どもた



楽しんで手伝いをする子どもたち。

〔注1〕パーマカルチャーとは、パーマノント(永久な)とアグリカルチャー(農業)あるいはカルチャー(文化)を組み合わせた造語で、恒久的持続可能な環境を作り出すためのデザイン体系としてオーストラリアで生まれた。Bernardは東ティモールの風土や文化にあった形でパーマカルチャーの普及を進めている現地NGO。

〔注2〕APLAが活動を共にしているエルクラ県のコーヒー生産者グループ。同時に次世代も育てることができると言えることなしだろうか?と。まだまだ問題は山積みだが、心強い仲間を見つけたことをみなで喜んで

(APLA事務局・野川未央) ■